OPINION
オピニオン・スライス
SLICE

タレント・俳優

松尾貴史さん

Takashi Matsuo

―― 松尾さんはどのようなお子さんだったのですか？

中学２年の頭まで神戸の布引中学校だったんですが、そこで友達と落語研究会をつくりました。サンテレビで「上方落語大全集」という今の文枝さんが三枝やった頃に司会をしていた番組があったんですよ。松鶴、春団治、当時の小文枝、文我、文紅、松之助、五郎（後の五郎兵衛）、正月だけ米朝師匠も出ていたんですが、そういう落語の収録を隔週で２本撮りでやっているので、それを友達と見に行ったりとか、そんなことをしていましたね。だから、落語は好きです。神戸松竹座が今の喜楽館の近くにあったので、そんなのを中学校のときに見に行ってました。最初、父親に小学校４年のときに角座に連れていかれて、米朝師匠が、「持参金」をやってはったんです。それまでレッツゴー三匹とか大勢でわあっとやったり、漫才で派手にやったりしている中で、着物のおっちゃんが出てきてちょこんと座って話し始めると、満席のお客さんがしゅっと集中してすごい喜んで。すごい人がいるんやなというふうに思ったんです。中学に入って、テレビの収録やったらただで落語を聞きに行けるんやと。よく見に行きました。

―― 大人が見に来ている中で。

そうですね。オープニングだけ噺家さんが客席にいるので、僕は三枝さんの後ろに座って映り込んだりできるんです。桟敷席で僕、「本番５秒前、４、３」あたりで後ろから三枝さんの足の裏をくすぐるんですよ。そしたら、三枝さんが身をよじっている、後ろでいがぐり頭の僕がうれしそうに笑ってるみたいなのがテレビのオンエアのときに確認できて、それをまた自慢したり、そんな子どもでした。

―― 美術にも興味がおありということですが。

美術は母親のほうが好きでしたね。岡山に母方の祖母が住んでいたんですが、しょっちゅう倉敷に連れていってもらって、大原美術館に行って絵を見て、その後「エル・グレコ」という喫茶店に行って、みたいなのが母親の好きな世界でした。

美術関連では、高校２年か３年に入ったぐらいに、おまえが行ける大学なんかないぞと高校の先生に言われて、勉強ができなかったものですから、どないしよう、でも、大阪芸大やったらお絵描きができたら入れるかもと思ったんですね。だけど、美術学科に行って絵描きになっても苦労するだけやから、広告業界に

行ったらええなと思ってデザイン科に入ろうと思って、そしたら本当にまぐれで入れたんですよ。入試で、ポスターカラーを持ってきなさいということで、５時間ぐらい閉じ込められて、ケント紙に音楽雑誌の表紙をデザインしなさいみたいな課題やったんですけど、たまたまいいアイデアが浮かんで、自己満足で「これ通るな」と思ったらちゃんと通りました。

―― どんな大学生だったんですか。

当時は、助手の先生が１年生も研究室に集めて飲み会を開いてたりしていました。今は未成年ですし、そもそも学内では酒は一切禁止じゃないですか。でも、当時は授業が終わったら研究室で飲み会みたいな感じでしたね。他の学科に面白い先生が多くて、僕は他の学科にばかり遊びに行ってたんですよ。美術学科には紙一重みたいな天才的な先生がいらっしゃったりするので、そういう人と遊んだり、津高和一さんという巨匠がいらっしゃって、同世代の岡本太郎さんと親しくて、二人展なんかもやっていた方が岡本太郎さんの物まねを教えてくれました。

―― それで今、岡本太郎さんのまねがおできになられるんですね。

それから、当時の映像計画学科の学科長が依田義賢さんといって、「スター・ウォーズ」の「ヨーダ」のモデルになった方ですけど…。

―― ほんまですか。

依田さんは、映画監督の溝口健二さんの作品のほとんどの脚本を手がけていらっしゃった方で、溝口健二さん関係のシンポジウムでUCLAに行った、ちょうど1979年あたりにルーカスと名刺交換したとき、依田さんの耳が長いとか「ヨダ」という名前が面白いと言って、「年下やのにからかいやがって」とすごい怒ってたんです。そしたら、その後、２作目の「スター・ウォーズ」がつくられてそれに「ヨダ」というキャラクターが出てきてるんです。字幕をつける人が「ヨーダ」と伸ばしているけど、「ヨダ」なんです。それが依田義賢さん。

その依田先生なんかと飲みに行くわけです。僕、映像学科じゃないのに紛れ込んで、第２研究室と称する天王寺の居酒屋に「僕も行っていいですか」、「ついておいで」と。で、オムライスをつまみに日本酒を飲むみたいなことをしていたんですけど、そのときに、依田先生から「あんた、しゃべってることおもろいさかいに、テープにまとめて録ってダビングして人に配って平和を訴えなはれ」と言われたんです。僕はそんな活動をする気にはなれへんけど、当時、音だけのコントなんかが流行っていたものですから、それをもじったようなのをつくってダビングして依田先生や色々な人に配ったりしていました。

僕、大学の頃からいとこが経営している北新地のディスコのDJ見習いでレコードを回す練習をさせられてたんです。大阪芸大を卒業した後、非常勤副手を１年間だけやったんですけど、その副手の給料が月４万円ぐらいにしかならないんですよ。それも夏休み、冬休み、春休みは給料が出ないので、年収32万円ぐらいでして、だけど、ディスコでDJ見習いで入ったら月10万円あげると。西宮北口の実家に住んで月14万円あったら何とか暮らせるじゃないですか。

それでそこに行っていたところに、結果的に最初に所属することになる事務所の人が遊びに来て、「遊びにおいでや」ということで事務所の社長さんのところに会いに行ったんです。「君、何か病気持ってますか」、「ないです」、「いやいや、賭け事に狂うとか女に狂うとか」、「そんなんないです」、「うーん、芸人には向いとらんな」、「別になる気はないので大丈夫です。ちょっと遊びにおいでって言われたから来たんです」、「そうか」と。でも、そのとき学生のときにつくったテープを持っていたので置いて帰ったんですよ。社長さんは、僕が帰った後で聞いたんだと思いますけど、僕は所属するも何も言ってないのに、電話がかかってきて、「ネタつくってきて」って。ネタって、僕そんな人前でやるようなネタはなくて、悪ふざけをテープに録っていただけで、そしたら「器

用そうやから物まねとかできるやろ」と。「ああ、ちょっと考えてみます」と。

その夜たまたま「11PM」を見ていたら藤本義一さんが出ていらっしゃって、僕、多分地声が似ていたと思うんですけど、これやったら簡単やなと思っていたら、「あさって空いてるか？谷町４丁目で待ち合わせや」と言われて、行くとまだ馬場町にあった頃のNHKに連れていかれたんです。そこに疋田哲夫さんという放送作家の重鎮みたいな人と古川嘉一郎さんという放送作家お二人が会議室にいらっしゃった。そこで覚えてきた藤本さんの物まねをやったら、「ちょうどええんちゃうか」と。今の「生活笑百科」の前は生放送で大阪から全国ネットで「しゃべくりバラエティー日本一」という番組をやってたんです。エッセイストでイラストレーターの和多田勝さんという方が司会で、毎回いろんな関西の文化人をゲストに呼んでという番組で、その回のゲストが藤本義一さん、またその日のテーマがコピー文化で、「君、このセットの陰にいて。モニターに藤本先生が映ってるから」ということで、和多田さんが「ちょっとこれ聞いてもらえますか」と言ってキューが来ると、僕が藤本さんの声で藤本さんが言いそうなことを思いつきでぺらぺらとしゃべる。藤本さんは、最初は「何やろ、これ」と思われたみたいですが、途中で「ああ、俺が昔しゃべった若い頃の音声を流しとるんやな」と、藤本さんは自分の声だと思ったらしいです。そしたら、その日、一緒に出ていた先代の春蝶さんが言ったことを盛り込んだら、「何だ」となって、そこへ僕が出ていったというのが初対面でした。

それで物まね漫談家みたいな感じで、「お笑いスタ誕」とか、毎日放送の深夜のお笑い登竜門番組みたいな、当時のべかこさん、今の南光さんが司会をしている「トラトラ道場」というコーナーに出てネタみたいなことをやらされたりとかして、５週勝ち残ったら何かもらえたんです。そんなようなことでレギュラー番組がつくようになっていきました。

テレビ番組のレギュラーがついた頃に、ラジオはもう既にレギュラーを持っていまして、最初に所属することになった事務所に置いて帰ったテープを、事務所がダビングしてニッポン放送とか朝日放送とかあちこちに送りはったんですよ。すると、ニッポン放送のナイターオフの夜９時－10時の１時間番組を１人で任されました。それから、朝日放送の「ヤンリク」という番組の中の花王が提供している週７日間、毎日10分間ぐらいある番組、その帯番組２つを割とすぐに持ちましたから大阪芸大の給料は要らなくなったんです。非常勤副手を更新しますかというのに「更新しません」に丸をつけて送ってそれきりです。気がついたらタレント活動的なことが始まっていたので、広告業界に入るとかそういうことを一切せずです。

非常勤副手をやっているときは午前11時から夕方の４時半か５時までしか給料が出なくて、その後の夜10時からディスコで見習いはあるけど、夕方が丸々空いているんです。それで何かないかなと思っているときに、「サンケイリビング」という新聞があって、それに習い事が色々と書いてあって、「共通語」とあったんです。「話し方共通語」、面白いな、広告業界に入るならプレゼンテーションみたいなことが上手にならんとあかんやろうと思って、話し方をそこで学ぼうと思ったんです。月から金まで毎日夕方６時から９時までみっちり授業があるのに月謝は月１万円と安くて、そこは電通、大広、萬年社、毎日放送、朝日放送、関西テレビ、読売テレビの７社が協同出資してしゃべり手を育てようというところでして、靱本町にある教室に毎日通ったわけです。そうすると、ナレーションの仕事の斡旋が来るんですよ。ラジオ大阪のスタジオに行って、そこで簡単にコマーシャルのコメントを読むと、15分か30分いるだけで8,000円ぐらいくれるんです。大阪芸大は朝から夕方までで2,000円ぐらいにしかなれへんかったのに。もっと仕事くださいと言っているうちに同時進行的に出演するということがだんだん増えてきて、自分もそういう志向があったんだと思いますが、もともと誘われると断らない人間なので、それでどんどん後に引けない。今さらデザイナーを始めようと思っても、みんな今どきパソコンじゃないですか。僕、カラス口[※1]と面相筆[※2]の時代なので、真っすぐの線もガラス棒を使って引くような感じなので、今さらやなみたいな感じで、自分の店の

※1　製図用のペン
※2　人や動物の面相がきによく使われた細い筆

ロゴとかはデザインしますけど、全部中途半端に来て後に引きにくいような状態になっているという感じですね。

── その頃から芸名の「キッチュ」というのは使われたんですか。

そうですね。最初に所属した事務所の社長さんに「最近カタカナの芸名が流行ってるから、カタカナの芸名をつけろ」と言われて、美術用語で粗悪品とか俗悪趣味みたいな「キッチュ」という言葉があったのでそれを持っていったら、「ええんちゃうか」となって、そのまま芸名として使うようになったんです。

── どんどんのめり込んで影響を受けた人は、中島らもさんという話を聞きました。

はい。僕が最初にタレント活動を始めた当時は、IDカードなんかなくてもテレビ局や放送局に何ぼでも入れて、知り合いがやっている番組に乱入したりとか当たり前のようにあったんですよ。そんなときに、当時、東天満にあった読売テレビのすぐ近くに最初の事務所があったので、「何か仕事ないですか」と言ってしょっちゅう読売テレビの制作部に遊びに行ってたんです。当時ディレクターで、今は「SFサムライ・フィクション」なんかを撮られた映画監督の中野裕之さん、その方がいて、「何かないですか」と行くと、「明日、暇？プランタンなんば8階のフォーラム8で中島らもさんのトークショーをやるんだけど、ゲストに来ない？」と言われて、前日に言うかと思うけど、「ああ、行きます、行きます」と。

その日のゲストが、ひさうちみちおさんと僕で、舞台には高さ1.2メートルの板を張り巡らせてあって、ゲストは1人ずつそこを四つん這いになって行って、板からひょっこり首を出して、同じく首だけ出しているらもさんとトーク。ひさうちさんの番が終わって、僕も這って行く。「次はこの方です、どうぞ」でひょっこり首を出してしゃべるという「中島らものひょっこり分裂島」というイベントでした。

そのとき初対面だったんですが、始まる前にバックヤードの従業員用エレベーターの前で3人でウンチングスタイルで座っては、放送禁止ネタみたいなことを言いながらくっくくっくと笑っていたんですけど、それが楽しくて、「わあ、僕がついていきたいお兄ちゃんがここにおる」みたいな感じになって、それからずっとらもさんを見に行くとか、イベントをやるというとついて歩いたり。でも、らもさんは親分肌じゃないんですよ。フレンドリーというか、すごいリベラルな人なので、権威になることを嫌っていらっしゃったので、飲み友達としてずっと連れ歩いてくれました。だから、僕がおごると言っても「ありがとう」と言うような人やし、らもさんの宝塚の家についていっては泊めてもらって夜中じゅう宴会をしたり。

１回、らもさんの家に急に行ってびっくりさせたれと思って夜中の３時に行ったことがあるんです。そしたら、玄関が開いていて明かりがこうこうと漏れてるんですよ。さすがこの家は起きてるなと思って、「こんばんは」と言うと、畳の部屋からロンドンブーツみたいなのをはいた奥さんが出てきて、「ああ、キッチュ、らもいるよ」って、手にハケと青いペンキの缶を持ってるんですよ。「何でそんなん持ってるんですか」と聞くと、夜中の３時に「台所を真っ青にしてたの」。すごい家やなと。で、らもさんとバーボンとか焼酎を飲んで。らもさんは自分の股間の先にたばこの箱とかお札とかをぴたっとくっつける「大阪吸盤ボーイズ」というネタがありまして、それを家で見せてくれるんです。次の日、らもさんから電話がかかってきて、「キッチュ、昨日、怪奇現象があったんや」、「どうしたんですか」、「僕がひっつけた５千円札、真ん中が焦げてるねん。僕は体液が塩酸なんやろか」。これね、お札が汚いから真ん中を消毒しようと、らもさんが100円ライターであぶったんですよ。それで焦げたんやと思うんですけど。そんな毎日でしたね。

── 自然にこの道を歩んできたという感じですね。

そうですね。東京に行っている間は、放送作家の人が桜新町に居候させてくれてたんですよ。３匹の猫の世話をすることを条件に半年ぐらい居候してまして、その頃にニッポン放送の番組の構成をなさっていた方で、一緒に帰るんですよ。途中四谷４丁目で降りて、タモリさんやらたけしさんやら山下洋輔さん、内田裕也さん、そういう人たちが毎晩のように来るバーに連れていってくれては、「バーボンを入れてやるから勝手に飲んじゃっていいからね」という本当に面倒見のいい放送作家の方で、カウンターでその人の瓶を飲んでいると、後ろでタモリさんと原田芳雄さんがふざけてるんですよ。後ろから芳雄さんが「おい、君、こっちおいでよ。関西だろ」、「そうです」、「一緒に飲もうや」と言って飲みながらいろんなことを話して、「今度おなかすいたらうちに遊びにおいで」、「ありがとうございます」。

で、別の日におなかがすくのを待って本当に電話をかけたら、「今、天ぷら揚げてるからおいで」と。行くと、桃井かおりさんとか松田優作さんとか黒木和雄監督とか若松孝二監督とか林海象さんとか、まだブレークする前の佐野史郎さんとか、すごい人たちがいっぱいいるんですよ。そこに混ぜてもらって芳雄さんが揚げてくれる天ぷらを食べながら、何というすごい世界があるんだろうと。そこが僕の居場所になって、東京に行ったら芳雄さんの後ろをついて歩いて、大阪に帰ってくるとらもさんの後ろをついて歩くみたいな、弟分気質みたいな感じで、色々教えてもらったりよくしてもらったりして、人に恵まれていたと思います。

── 今、落語や舞台もされていて、そんなのも自然にという感じでしょうか。

そうですね。落語も小学校の頃から好きだったものですから何にもハードルなく、ただ、落語界に対するリスペクトは強いから、利いたふうな口は利きたくないなみたいなところはあります。

── 修行はされたんですか。

一切していないです。胃がんでもう亡くなったんですが、吉坊とか吉弥さんの師匠の桂吉朝さんがよくしてくれて、膝つき合わせての稽古をしてもらったことはないですが、アドバイスはもらっていて、「僕、本職じゃないのに落語なんかやっていいんですかね」と言ったら、「免許事業やないねんからやったらええがな」と。吉朝さんとの二人会も阪急ファイブのオレンジルームというところでやらせてもらいました。２人ともらもさんに新作を書いてもらって、僕には家庭内宗教戦争みたいな話を書いてくれて、吉朝さんには適塾を舞台にした、ただ普通に読むだけで50分ぐらいかかるような歴史上の固有名詞がいっぱい出てくるすごい難しい話を落語会の２日前に書き上げてきました。さすがの吉朝さんも当日やりかけたんですよ。でも、「やっぱり出てきません。すんません。２日前に上がってきたんで覚え切れませんでした」と言うので、僕が出ていって、「松竹新喜劇がやっているリクエスト新喜劇みたいにリクエスト落語会に切り替えます」と言って、吉朝さんのファンから「じゃあ、くしゃみ」とリクエストされると、「くしゃみ講釈、大丈夫ですか」、「あれやったら大丈夫」ということで「くしゃみ」をやって、らもさんと３人のトークコーナーもやって、楽しい落語会でしたよ。「吉朝・キッチュのメルトダウン落語会」というタイトルです。

――「朝まで生テレビ」ならぬ「朝までナメてれば」を拝見しました。ああいうネタはご自分で書かれるんですか。

あれは自分で書きました。あれは、最初は舞台でやってたんです。紀伊國屋ホールで山藤章二さんがプロデュースしている落語会がありまして、「今度さ、物まねのネタで、今、討論会の番組が話題だからあれのパロディーをやってみたらどう？」と言われて、じゃあちょっと考えてみますと言った頃に、ちょうどらもさんが「朝まで生テレビ」に出たVHSをくれて、「これ、君のネタになると思うからあげるわ」と。

――１人でいろんな方をされていたんですが、あれを舞台でやっていたんですか。

舞台でやるときは、寄席文字で田原総一朗と真ん中にあって、大島渚、西部邁と書いてある紙、寄席でいう「めくり」というやつですが、長テーブルにそれをぶら下げて、その前に行ったらその人になる。つまり、いちいち「何とかです」と言うと討論にならないじゃないですか。だから、その前に行って、こうやって走り回りながらやるみたいな。それを横澤彪さんというフジテレビのプロデューサーが見にきていて、「テレビでやりなよ」と言われたので「冗談画報」で１回やったんです。そしたら、今度、重ね撮りで扮装も全部やってクロマキーで多重撮影してやろうと。そんな面倒くさいことと思いながらやったのがあれです。

――人をうまく捉えているなというか、ちょっと風刺の効いたというか、からかっているというか。物まねは昔は完コピでしたが、今はどれだけデフォルメするかというほうになってきていて、松尾さんが物まねを始められたときは移行期なのかなと思います。

僕はデフォルメが下手で、デフォルメが上手だとブームになるんですよ。僕はデッサンでやってしまうので、僕のやっている物まねは流行らないんです。それは山藤さんの、つまり似顔絵を描いている人の理屈と同じなんですが、肖像画は流行らないけれども、似顔絵は流行るんです。それはデフォルメするから。描かれた本人が喜ぶものが肖像画で、描かれた本人が「俺、こんなんじゃねえよ」と言うのが似顔絵で、物まねもそうで、物まねされたら「俺、そんなんじゃねえよ」と言うじゃないですか。でも、周りは「似てる似てる、あんたこんなんやで」と言うでしょう。あれは似顔絵と物まねがすごく似ているところです。

――お芝居もされていますね。今後予定はおありですか。

今年の11月から始まる「二兎社」の永井愛さんが台本と演出の2014年に上演された「鷗外の怪談」、キャスト全員を新しくしての再演です。森鷗外とか永井荷風、そういう人たちの時代の話です。鷗外の役をやるので去年から体重をちょっと落としていってます。

――映画もありますね。

映画は８月６日公開予定の「キネマの神様」という、フランスにお住まいの原田マハさんという方が書かれた小説が原作です。山田洋次監督が色々と工夫を凝らして原作からマイナーチェンジもして、あとコロナになってからの状況も色々と盛り込まれています。菅田将暉君が若い頃の主人公で、年配になってから志村けんさんのはずだったんですが、志村さんが亡くなったので急遽沢田研二さんになりました。これはネタバレになるから詳しくは言いませんが、沢田研二さんが歌を歌う場面があるんですが、そこで僕、大泣きしました。菅田将暉君が映画監督で、僕はその撮影監督、つまりベテランのカメラマンの役でして、意見が対立したりするんですが、そういう役で前半のほうで出ています。

――原作からは少しアレンジされていますよね。

そうですね。コロナのこととかを色々と盛り込まれたり、あと志村さんの一件なんかにも配慮というか、そういう色々と変わっている部分があります。

――他にはどのようなご予定がありますか？

同じく秋にドラマにも出ますが、現在撮影中で、詳細は追って発表されると思います。今後の予定は大体そんな感じです。

――芸能の世界でもウェブを取り入れたりされているんですか。

はい。例えばテレビの収録もリモートでやったりもありましたし、ラジオもリモートで出たり、今やっているRKB毎日放送の番組も週１で朝Zoomでやっています。あとは、26年ぐらい前に「12人のおかしな大阪人」という舞台があったんですが、それを今リモートで朗読劇としてやろうと。というのは、「12人の優しい日本人」という三谷幸喜

さんの作品がかつての出演者で再現をZoomでやったんですね。じゃあ、その昔それのパロディーでつくられた「大阪人」のほうもやろうかとなったらしくて、僕はオリジナルメンバーじゃないんですけど、オリジナルメンバーで出られない人がいたので、その役で僕が入って去年配信しました。

── ユーチューブへの進出もちょうどタイミングが合ったということですか。

そうですね。「デペイズマンショウ」というタイトルで、ウケることをやるよりは自分がやりたいことをやる場所にしようと思ってやっています。

── そのタイトルはどういう意味があるんですか。

フランス語で、遠い異境の地から突然連れてこられたみたいな意味らしいです。美術用語でデペイズマンというのはシュールレアリズムの手法で、ここにこれがあったらおかしいやろうという手法です。マントルピースから機関車が煙を吐きながら出てきているとか、空に山高帽をかぶったおっちゃんがいっぱい浮いているとか、木の枝とかあちこちに溶けた時計の文字盤が垂れ下がっているとか、ここにこんなんがあるのはおかしいじゃないのという手法をデペイズマンというんですけど、唐突な演出ということです。その言葉がおもしろいなと思って、ウルトラマンとか「何とかマン」みたいやんかと思って。ディペイズメントみたいな感じの英語読みがあるのかも分からないですけど、フランス語読みでデペイズマン、それに「ショウ」をつけて、「スネークマンショー」みたいな「デペイズマンショウ」です。

── 新聞連載は、こんなことを書こうと思って書かれるんですか。

思いついたことから膨らませることが多いです。あまり計画的には書いていないです。ワープロソフトを立ち上げて、これについて書こうと思うと、それにまつわる色々なことをどんどん箇条書きにしていって、次にどの流れにしようと思ってその順番をコピー、ペースト、カットで変えて、そこに肉づけしていくような感じで書いていく形が多いです。

── 入稿してから掲載まで３日ぐらいかかるでしょう？

もっとかかるんですよ。火曜日が締切りで日曜日に載るので、だから状況が変わってしまうんですよ。「まだ何の説明もない」と書いているところには、「この原稿を書いている火曜日の時点では」というのを書かざるを得ないときが多いです。

── あの連載の依頼は、どういう経緯で来たんですか。

2012年までテリーさんがやっていて、その枠でやりませんかと言われて、最初の頃は落語の話とかそういうのばかりやっていたんですけど、あと言葉遣いがちょっとおかしいねみたいなものにツッコんだりと

か、その頃ですよ、第２次安倍政権が始まって、政治家のやっていることに違和感がすごく増えてきちゃったものですから政治関連の話が多くなってしまったんですけど、本当はそんな趣旨じゃなかったんですけどね。

── 報道機関が過不足なく伝えるべきことを伝えられていないから松尾さんが言う、それを新聞記者がお願いするみたいな感じで、そこがいびつだなと思います。

それは客観報道みたいなものが前提にあるから、そういう意味ではそういう場を与えてくれているということには僕は普通に感謝するしかないかなとは思っています。ただ、「日本の新聞は公正中立」みたいなことは、僕はまやかしだと思います。あらゆる人間が何か書いたら絶対公正中立なんてあり得ないし、その人の考えがなかったら、それはその文章に意味がないと思うので、公正中立という気持ち悪い呪文みたいなことはやめたほうがいいと思っているんですけどね。海外のニュースペーパーは結構自社の論調をしっかり持っているじゃないですか。それがいけないというのは何かちょっとよく分からないですね。

── 新聞社から、ノーとか、このテーマは駄目ですというのはないですか。

この９年間１回もないですね。「当社の表記に合わせました」みたいな修正は毎回ちょろちょろとはありますが。

── この内容はちょっと困りますみたいなことは？

「これは事実が確認できなかったので断定的な言い方じゃないほうがいいんじゃないですか」というのが来たりはします。

── 弁護士に対して思うことやどんなイメージを持っておられるか、あるいは、もっとこういうことを発信してよとか、そういう思いはおありでしょうか。

弁護士といっても色々な方がおられ、一言でくくりにくいですよね。ただ、期待できるのは、弁護士さんは、社会に対する強い思い、エネルギーがないと司法試験を通るところまで行かないんじゃないかと思います。法律に詳しいだけに悪意を持った人たちが悪い使い方をすることも出来る、だって、包丁でいい料理をつくることも人を傷つけることもできるわけじゃないですか。そこら辺はそれぞれの品性なんだろうと思うんですけれども、有能で了見のいい人が増えてくれるとうれしいなと思います。

── それから、大阪に対して、政治のこと、大阪人に対することなどコメントをいただけますか。

大阪は品格のあるまちなのに、政令指定都市の中でいちばん下品だと思われている。これは悔しいですけど、長い間かけて、テレビがウケ狙いのことをやり始めたんですね。つまり、大阪で街の人に何か投げかけるとこんな反応をするみたいなことをショー的にやるようになって、もともと面白いというか、文化度が深いので、そういう対応をしてくれる人も多かったことは多かったでしょうけど、ただただあほなノリに付き合ってくれるような演出ばかりになってしまっているというのがおかしいなと思うんです。それはキャラクターもそうですし、言葉遊びの文化とか、歴史もそうですよね。難波宮という日本で一番古い都があった場所じゃないですか。平城京とか平安京はその後ですよね。そういう歴史的な文化とか、世界にも誇れる例えば人形浄瑠璃文楽とか。

あと、僕は粉もんが大好きですけど、食文化に関してもお好み焼きとたこ焼きと串カツだけのまちみたいに思われていて、これが本当に腹立たしくて、大阪って日本の食の最高峰なんです。特に新鮮な品物が手に入って、それをアドリブで割烹という形で客のニーズに合わせて当意即妙にうまくして出してみせるというようなことができるスキルがすごく高い料理人がそろっていたのが大阪なのに、なぜか京料理が最高峰みたいになってしまって、もちろん京都は京都で、帝がいるところなのに新鮮なものが入りにくかったから工夫を凝らして食文化が深くなったという側面はあるけど、やっぱり京都から大阪に修業に来ていたわけじゃないですか。「包丁一本さらしに巻い

松尾氏の「般゛若（パンニャ）」（福島区）のカレー

て旅へ出るのも板場の修業」というのは、京都あたりから大阪の法善寺横町に修業に来ている人の歌じゃないですか。どれだけ大阪の食文化がすごいか。食い倒れのまちって、食い過ぎて倒れるというB級グルメの話ではなくて、あれは食い物のために身代が傾くぐらいに肩入れするという大阪の商家の旦那衆のことを表した言葉であり、食い過ぎて倒れるじゃないですからね。そういうことを何かちょっと勘違いしているところがありますね。

昔、大阪の景気が良くなったときに大阪の人数が増え過ぎて、大阪の船場の深い文化、品格を持っているあきんどたちが、従業員を店に住まわせないといけないので、その人数が増えたから旦那衆は阪急沿線に屋敷をつくるわけですよ。「細雪」の世界ですよね。だから、神戸、芦屋、西宮のあたりに高級住宅街ができて、旦那衆はそっちに行く、従業員たちは大阪。奥さんとかお嬢様たち、こいさん、いとさん、とうさんはみんな芦屋、西宮、東灘あたりに住むわけです。そうなってくると、そっちがおしゃれなまちになっていって、華美な服装をしていたら旦那に怒られるけど、旦那は昼間は仕事に出て行ってくれるから、奥さんやらお嬢さんやらはおしゃれに気を使えるようになるわけです。そうすると、アンノン族みたいな読者モデルのはしりが始まるわけです。東京より関西のほうが読者モデルは早かったですからね。それで、神戸から阪神間が――阪急間と言ったほうがええのかも分からんけど――おしゃれなまちになっていきましたというのでちょっと勘違いが生まれているけど、本当はおしゃれなものも洗練された文化も大阪にあったと思うんです。それは堺の千利休も含め、そこら辺は世界に向かって胸を張っていいようなことがいっぱいあったはずなのに、自ら下品におとしめているみたいなところが、これはテレビの責任が大きいと思いますが、そこら辺の誤解が低温火傷みたいに深くまで達してしまっているのがすごく悔しい。大阪はもっと深い洗練されたまちやぞということをアピールしてくれることに弁護士の皆さんが荷担してくれるといいのになと思います。

―― 活動の場を東京に移しているけれども、日本の活動の中心に大阪、関西の人がかなりいると。

そうですね。原田芳雄さんも権威主義が嫌いやったので、関西の人って権威に追随しないというか、江戸は人口が一番あったときは100万人ぐらいいたそうですけど、武家が半分ぐらいで、あと半分の50万人は町民と農民。そうなると１人の侍が１人の町人を見張っているみたいな感じです。そうすると、派手な色とか柄は着てはならない、中間色を着なさいみたいなことがあったけれども、大阪は江戸時代で人口が一番あったときで35万人、その中で侍は800人しかいなかったそうです。だから、お上に気を使わんと派手な服が着られた。ヒョウ柄文化はそこにルーツがあるかもしれないと思います。ただ、浅草なんか行ったらヒョウ柄のおばちゃんもいっぱいいますからね。結局、大阪を語るときには下町ばかり見て、東京を語るときには新宿とか六本木、渋谷を見るから、そうするとヒョウ柄の人は少ないじゃないですか。本当は浅草とか上野に行ったらヒョウ柄はいっぱいいるんですよ。そこら辺の観察する場所が間違っているなと思います。知らんけど。

―― 本日は長い時間、本当にありがとうございました。

こちらこそありがとうございました。

2021年(令和３年)５月19日(水)

［インタビュアー：山本健司
大川一夫
飯島奈絵
寺川　拓］